

讀書法

百人一首部



讀書法凡例

凡倭學ハ讀書法を正しを最要と見然れば守覺

法親王の右記頼諭僧正の真俗雜記行譽上人

の謄書抄など、おろくその事成いへる書わね

り、東山左府實熙公の名目抄よりて、おろく

具よりて、おろく其序より夫於我朝稱

名目多不當音訓、又相交清濁故不口傳、輒不可呼之、無口傳而呼之必失法、自告至今家々說々、雖區分能學之深思之非無一義矣云々、或有連聲之相呼、或有五音之相通、故雖不當韻聲意味、尤深矣、爰世不嘗之、猥卑乖音義、以失名目之法、唯要當切韻、以為肝心之理、誠是可謂不知道之

術計、誰許之也、とんぬれを辨知ざる村学先生の、あつり顔は物書いでも、あつと出たるハ、かゝるや、いふたういふあつりや、

凡手習讀書の師として、児童に教授ん人音訓、清濁を心して習はせめざれば、生長後先入主の病除ぐ、恥かやういふに、いふそは

在京年久しに猛者も猶生國の東なりをば

らびくも、京童よかびきくはるはるごとく

凡手習の初はいろは、一二三の数字を本とて

いよへ難波津浅香山の分、天地の分をどぞ

おめけえぬ、讀書初は三十三教仙百人一首

實語経、童子教、今川状、庭訓往来、などより入る

てゐる、今世の風俗なる、こゝに繼て、職原抄

神代紀、なども讀習もおめたきとぞになん

凡清音に。○圈点、濁音ふ。○重圈、半濁、弦

月圈、歌と別はな、鴈金圈、名目より引

両点、句讀、麻子圈、事を分つふ、三角

圈、とも、兼を兼、恵を恵、齊を齊、慶を慶

ちどに作^{つく}りて、字^{あざ}画^えを省^{おほけ}るハ趙^{てう}翼^{よく}が陵^{がい}餘^よ叢^{そう}
 考^{かう}、臨^{りん}文^{ぶん}避^ひ諱^ぎ例^{れい}を奉^{あげ}論^{ろん}して、近^{きん}世^{せい}缺^{けつ}點^{てん}畫^{くわ}之^の法^{ほう}
 最^{さい}為^{いた}簡^{かん}易^{えき}可^か遵^{そん}矣^い、といひ、唐^{てう}六^{ろく}典^{てん}ハ若^{もし}寫^{かう}經^{きやう}史^し群^{ぐん}
 書^{しや}及^ぎ撰^{せん}錄^{りく}舊^{きう}事^じ其^{その}文^{ぶん}有^{ある}犯^{はん}国^{こく}諱^ぎ者^{しや}皆^{みな}為^な字^じ不^ふ成^{せう}
 ともゆるにうけ、此^{これ}是^{こゝ}書^の私^{みづかひ}定^{のま}ちり、文^{ぶん}政^{せい}已^い世^{せい}、
 仲^{ちゆう}秋^{しゅう}端^{たん}午^ご、松^{しょう}屋^{いつ}主^{しゆ}人^{にん}平^{へい}與^よ清^{せい}識^{しき}、

百人一首讀書法

▲天皇

ワラをハ
訓ハ誤ニ

▲親王

ワラをハ
訓ハ誤ニ

▲朝臣

アツソンと
訓ハ誤ニ

▲法師

ホツシと
訓ハ誤ニ

▲藤原

▲平

天智

▲かりほのいが
假 房 房

持統

▲志ろとへ
白 妙

▲あめのわく山
天 香 具

▲あひさの▲
足引 山鳥○○ざうは

尾 左の 垂 尾

山部赤人 やまべのあかひと

打出

富士 高峰
うのたふ

猿丸大夫

大丈オホタケハ、公キミ式シキ令ノリヨ、五イ位イ已マ上カミノ稱ナヅケヨ、（新ニシテ）名ナ元ゲン重ジュウ仁ニ紀キ
仲ナカ哀アイ紀キ、（オホタケ）ナミトモ、大丈オホタケトあるモ、重ジュウ臣シンを二ヘツギミ

とりつゝは漢字を當しめて實ハ唐稱ニ後ハ訓法をうて左右
京修理大膳をどやうの職の大夫の稱ハ獨久五位の稱ハ
清ていつゝ官位の唐名ハもてて清訓漢音の例をもて上代の唐
稱ももつたこととつゝなれどもあつてもサル二口ノダイブとのちを

大を清、夫を半
濁を訓べし、

おくやまにききちりきりけ

中納言家持

置 好 々

仲磨 なかつら
磨ハ麻呂の合字ニ或
ハ箇ニ作るもねある

△
字
月

喜撰きせん

吾
奄

世をうち山

小野 小町

▲ 花の色

徒
〇〇

蟬丸

▲
往
還
也

逢坂の関 さう せう

参議みぎ堂どう

海原八十嶋うみはらやそじま

僧正そうじ遍昭へんしょう

あまうらやせあまうらやせ雲くもけけううひひちち次つぎ

雨あめ少女しょうじよ姿すがた

なとめハ少女未通女なとめハ少女未通女と云いふこゝろをこ女と書ハ假名遣こゝろをこ女と書ハ假名遣

て誤

かゝ

陽成院やうせいゐん

峰みねうらわつる

いそはりうて

河原左大臣かわはらさだみじん

信夫毛地のぶのふもち摺すり誰故たれゆゑ

光孝みこう

夢ゆめの妙たぎいそ

行平ぎやうへい

稲葉いなばいそよのふれいそよのふれ家けにあにあある

在原業平朝臣わらひのなりひらのあそみ

如此諱の下に、朝臣宿祿縣主神主かしくしげのしたに、あそみしゆくそくけんしゅじんしゅなどやの尸かみを書かつるハ、皆のゆゑを加て訓みなのかげをくわてしんや

在原朝臣業平わらひのあそみなど書かたるハ、氏尸うぢのしの同おなものゆゑをそへてよみ入いれる名なの同おなにハのゆゑを加へざるなり

ちとやちとやかかる神代かみよ

かゝるもなわみ

千早ちちはや

振ふり

韓かん

紅こう

水みづ

はくはく

綾あや

敏行朝臣

▲きよのえ ▲よるきんや
住 江 夜 副

▲ゆめはかみひち人目く。
夢 通 路 過

伊勢 ▲なまゐるくさく泥草の ▲らむ
難 波 沼 短 不 逢

而て

元良親王

▲いよ。くねる。いなる。
今 當 同 難 皮 在

▲くさく。くさく。くさく。くさく。
身 盡 而 侍 逢 思

素性

▲いよ。くねる。いなる。
今 將來 云 同 待

▲いよ。くねる。いなる。
出 俊頼の真跡云くさくくさくくさくくさく

文屋康秀

▲あなるきん。▲じんふんを
姜 宜

くさくくさくくさくくさく

大江千里

▲ち。くさくくさくくさく
千 物

菅家

▲ぬき。くさくくさくくさくくさく。
幣 取 不 敢 紅葉

貞信公 ▲をく山

三條右大臣 ▲名うねる ▲河小坂山

ねさねう 五味子 ▲人よあられくさうも 不被知而来縁

いれ 欲得

兼輔 ▲いづる川 何時見ま故 手恋

宗干

凡河内躬恒 凡大はねまに安閑紀推古紀などに大河内と云ふ人、和名物丹波加佐郡の郷名凡

海を於布之安石と云ふに据て、オフレカフチと云べし、オフレハ通音シムカバウチをカフチと書ハ、ハウの約カれをなり、

▲なまやん ▲おさやん 折 置 給

壬生忠峰 壬生ハ丹生とも美布とも云ふよりて称別ノ貫之の真跡より、のなまねと書たるに据べし、拾芥

抄の壬生氏が建ふ、美福門といふは、証てみづとのをわりの誤、壬生を仁徳紀より余布と訓、天武紀下より美布と訓て、通音シ、節用集より釈迦牟尼佛氏を載て、ニグルベとも、ミグルも、国よりて別は呼といふも、なるべし、

坂上是則

春道列樹

あつてもへべぬ
流 不取

紀友則

あつてもへべぬ
静 無

興風

貫之

人いづ
否

保養父

あつてもへべぬ
何処

文屋朝康

右近

あつてもへべぬ
不取 誓 命

あつてもへべぬ
暗

参議等

あつてもへべぬ
浅 茅生 小野之篠 原

兼盛

あつてもへべぬ
色 出 来 向

壬生忠見

あつてもへべぬ
恋 為 云 思 初

一〇

元輔もとすけ

▲かみは神を志あり五 綬

▲よき名の根未

山

權中納言敦忠ごんなんごんあつちゆう

▲河比たに見而

朝忠あそちゆう

▲あふのたえそしあふ逢事 絶而 無

謙徳公けんとくこう

▲河比可憐 可云

▲おほ不覺而

▲あけいづに徒

好忠こうちゆう

▲かちなえちくふもあぬびの道梶 緒 漸 行 方 不知 惑

恵度けいど

▲やくむ八重 葎

重之しげゆき

▲風をいづいづうつ浪あおのまじ強故 石 打 如 已 而已

大中臣能宣おほなかつのみちのり

▲あいのうひるばゆえ衛士 焼 火 夜 燃

て而

▲きえはもの成こそわり消 乍 物 思

義孝

▲な〜か〜う〜いのちを
不惜 有之 命 副

▲あ〜く〜く〜れ〜お〜び
永 欲得 思

實方

▲え〜や〜い〜ま〜の
得 伊吹 燃 思

道信

▲な〜ほ〜う〜め〜き
猶 恨

右大將

道綱母
母と稱い夫死ていよに後ふ
う〜けて後家のことなり

▲い〜ん
如何

い〜ん
久

儀同三司母

儀同三司ハ准大臣にて内
大臣の次大納言の上なり

▲い〜ん
不忘

1. の〜と〜
行末

▲け〜ふ〜を〜り〜れ〜いのち〜
今日 限 命

と〜ね
願

大納言公任

▲た〜そのお〜いた〜え〜
瀧 音 絶 而

▲さ〜ほ〜
猶 用

和泉式部

▲わ〜び〜で〜ふ〜い〜ま〜ひ〜と〜ひ〜のあ〜
思 出 今 一 度 逢

便り

紫式部むすしきぶ

▲めくろあひて

▲くろねけよハ
雲 隠 往 夜間

月

大貳三位だいふたさんみ

大宰大貳成章が妻なれど、大貳を呼名とて、後一
各院の所乳母にて、三位は威ぬ、三位ハサンミと訓

て、散位をサン井
と呼よじうろ

▲おなれさば
稻名 茶 原

▲いそそよ
其

赤深衛門あかふかのゑもん

▲ねなまのあを
痲 可
▲かろく

まどろみ
逆

小式部内侍こしきぶのちうだい

内侍ハ掌侍しやうだい、四人の中、第一を勾當内侍と
し、長階ながかゐの殿のは局きやうあれば長階局とも称さ

第二第三を氏内侍といふ、源内侍、平内侍、藤内侍など氏をりて
称し、其中第二内侍にハ所縁よかりの喚名よびなを付て、大納言内侍、右
衛門内侍ゑもんちうだいなどもいへり、第四を新内侍しんちうだいといひ、時よりて四人
共風流の喚名よびなを付て、いふもいへども、一概ハいひづゝ、然て
内侍司ちうだいしとして、内の女房司にようしハ長官ながかんハ尚侍しやうだい二人、次官すけハ典侍てんし四人、丞しやう
ハ掌侍しやうだい四人ある、掌侍ハ男官おとくわんの丞しやうに當りて、内侍司の取シマリ
役なれど、左右衛門尉じやうゑもんゑいを左衛門右衛門、左右兵衛尉じやうゑいゑもんゑいを左兵衛右
兵衛ひやうゑいとのみ呼て、尉ゑいを都くとも、内侍とのもとよみ、尚侍典侍

ハ必ズナイジノカミナ
ジノスケといふなり、

▲おほえ山いく社のる
大江 幾

のりけきハ
遠 ▲何まのりたて
天 橋 立

伊勢大輔

大輔ハダイフと外を濁リフを清てよむサ輔ハ
セフとフを半濁ハ訓とて大夫の外を清フを半

濁ハ訓又職大夫の上下を濁て
訓ハ別て訓法をよべし

▲いふべの
古

▲やうざう
八重 櫻

▲けふあつてのふもほひ
今日 九 重 艶

清少納言

清原元輔が女として、氏の字を省て清とよハ在
中將藤中納言管掌相おどろとしか納言ハ縁あ

る呼名な
うづし、

▲あふ坂の園のりき
達 不 許

左京大夫道雅

▲いふくつおもひたえ
今 只 思 絶

▲とほろり紙
云 便 欲 得

權中納言定頼

▲うしろのかいさりたえ
宇 俗 川 霧 絶

たえよあつてききもさるやのりろき
絶 顯 渡 頗々 細 代 木

相模

▲こひよこりあん名もそをけれ
恋 朽 去 惜

大僧正行尊

▲あづまれとねん
可憐 思

周防内侍

▲あき
益 無

三條院

▲あき
存在
▲あき
恋

よるの月
夜間

能因

良選

▲あき
出而

▲いつくもねる
何処 同
秋の

ゆふれ
暮

経信

▲ゆふれ
成
田 稲 葉 音 信

もて

祐子内親王家紀伊

▲あき
音 用

▲あき
空 不掛

匡房

▲あき
峯 上

これと蔭イシの字の心はあつて、それハ限カハりて、光ミツを限カハり越ワる
て掩オホふ之、利リの字を加カへと訓クも、利得リトクの糴ソクをうくるより、

呼名^ナせうとてぬ、おうくの別當^{ビョウドウ}の中に、檢非違使^{ケンピワイシ}のものを、別當^{ビョウドウ}とりよへ、頭^{カビ}の中に、藏人^{クワシノド}頭^{カビ}は限りて、字音^{ジオン}はトラと読みよぶといふ、されど女房^{メイナ}の喚名^{コヒ}は、いふにもいふべけ
 といふ、必檢非違使^{ケンピワイシ}、別當^{ビョウドウ}の所縁^{ユカリ}の者^{モノ}とを、さういふ、

▲
 かなよむ

難
 波

難
彼

江 一 夜 故

一夜故

式子内親王

▲たのぢよたえぬハたえ
王 絶 去者 絶

王

豬

絶

去者絕

ね
ち
ら
へ
も

よろりろ

弱

殷富門院大輔

雄鳥 海人

雄島

海人


 為
 隔
 子
 子
 子
 為
 隔
 子
 子
 子

儒

儒

後京極攝政前太政大臣

和長卿日記云，凡儒中故實者，天子之追號後享用。

音讀、大臣、称号之時、後字、用訓讀、是讀法之故實也。後深草院、一号者、用訓讀、云々、其様御不孝之讀、不剛好之義也。又大臣、称号、後京極殿、之一号、人皆後字、用音讀、是無殊事、只以言好之義也。故自由之讀也。何ゾ、後ノ京極殿ト申事、有其煩哉、と云々、後ノ字、天子の内、追号にハ皆音讀、とて、後深草院のモノ、千ノフカウサノ井ノと称奉る。臣下ハ、後京極殿ハ音ヨリハ、べく、その外ハ悉く訓讀の例ニ、官職五の枝々、とて、後徳大寺、後京極、ハ古ヨリ音ニ讀來、よゝひなれど、ひがとをり、

二條院讃岐

▲志はひまゑぬおきもの
塩 干 不見 伸之

いけ 乾 同 无

鎌倉右大臣

▲はねよもかめね
常 冀 哉

▲何まね
海人之

なふねのつるていかなるも
小 舟 繩 手 悲

前大僧正慈圓

▲おほけさくう地世の
不相 應 序

氏よねほ
掩

權中納言定家

▲まつほの浦ゆふさき
松 帆 夕 無氣

よやくやりの

正三位家隆

▲從二位なる
を誤り

後鳥羽院

▲人も紙
可惜

▲何ちきなく
益 無

世をわづらふものなまふ
思 故 物 思

順徳院

▲りーや
百石 城

▲あはれありある
猶 餘 有

120813

柳之軒二世
服部浩斎





